

挟間の天狗拍子

豊前市の挟間という村のお話でな、天狗さんが出てくるんじゃないよ。

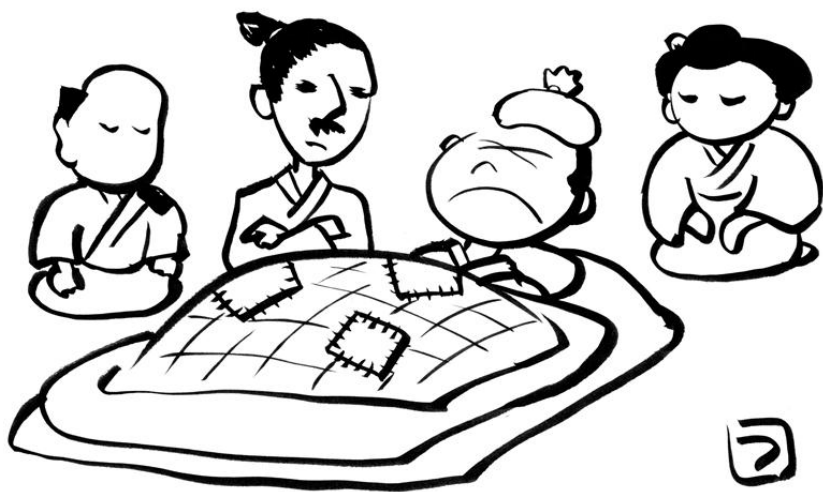
昔々の挟間の村は、米作りや野さい作りがさかんな村であつたそうじゃ。はたらきよつたもんじゃ。日の出とともに田畑に出かけ、日が西の山にかくるまで一生けんめいにはたらいておつた。ところが、そんなおだやかな村にこまつたことが起きたんじゃ。

ある年の冬のことじゃつた。病にかかつたわか者がおつてな、なかなかおらんで日に日に弱つていったそうな。それどころか、わか者の父ちゃんや母ちゃん、じいちゃんまでが同じ病にかかつてしもうた。となり近所の人たちもそれはそれは心配し、毎日のようにわか者の家に行き身回りのお世話をしてあげていたそうな。

ところが、それがもつとで大へんなことになつての。何と、わか者の家をたずねた近所の人たちが次から次へと同じ病にかかり、中には死んでしまふ人もでるしまつ。

村の長はそんな村人の様子に心をいたため、はやり病を止めるに

村人たちもそりゃよう



はどうすればよいかと、毎日毎日なやみつづけたそう。そして、食うものも食わず、求菩提の権現様に一心においのりしたそうじゃ。

「権現様、どうか、やはり病から村人を助けてください。村からはやり病をなくしてください。」

こうしていのりつづけていたまん月の夜のことだった。村の長の目の前に、七色の光がかがやいた。そこには権現様が立っておられ、美しいお声が聞こえてきたそうじゃ。

「おまえのきがんしていることはよくわかった。その昔、鞍馬山でもよおしたという田楽をするがよい。同じように求菩提の天狗をまねけば、ねがいとはどけられ病はかならずやなおるであろう。」

そうおっしゃって、権現様は消えて行かれたそう。村の長はさっそく村人を集め田楽を夜通しもよおした。田楽とは笛や太こを鳴らしてまうおどりのこと。一心にまう村人のすがたを見ながら、村の長は求菩提の天狗さんまでねがいがとどいてくれることを一生けんめいにいのりつづけていたんじゃ。その時、とつぜん村に風がふき、なんと求菩提山の天狗があらわれたではないか。そして、

「この舞を、末代まで行えば、干ばつの時に雨をふらせ、疾病、火災の難をのぞき、天下泰平、五穀豊穰



「がかなうであろう。」

と言い残し去って行ったそうじゃ。

するとどうじゃ、あんなに苦しんでいたわか者や村人は次々と元気になった。それを見た村の長もうれしくてたまらんじゃった。ふしぎなこともあるもんじゃなあ。こんなことがあって、元気になった村人は、いぜんにもまして農作業にはげんだそうな。

その後、挟間では、干ばつになると、わか者たちが山ぶしすがたの白しようぞくに身をかため、大うちわで風をおおぎながらおどる天狗拍子がまわれるようになったんじゃ。わか者のまわりには男子五人が古老の作ったわらじ、きやはんすがたで踊る。さいごに、やおら、まき物を取り出し、天空に向かつてさい文を読み上げ、雨ごいをしたんじゃと。じゃが、時代とともにこん天狗拍子もまうことが少なくなり、今では年配の人しかおぼえていないんじゃと。何ともさびしいこつちや。

一心不乱に祈願すれば雨がふるといふ、天狗拍子の舞は歴史が古く、平安時代のころから伝わっています。かつて牛若丸が鞍馬山に登り、お坊さんに弟子入りして修行をつんだ時、農民の舞楽である田楽を大変好んだそうです。ある時、田楽に天狗を招くと、天狗は一瞬にして舞に合わせて、太鼓、笛、チャンカラを使って拍子をとったといわれ、これが天狗拍子の起源とされています。

(米村祥子)



挟間の天狗拍子